

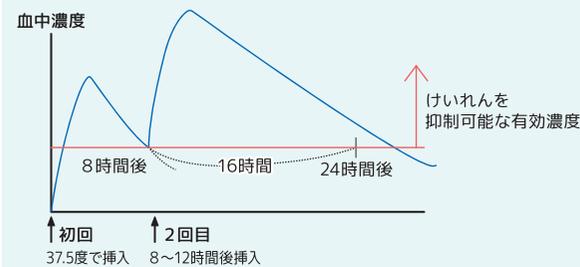
薬剤師から説明!

ジアゼパム坐薬 (ダイアップ坐剤®)の 使い方と注意点



薬剤師
濱崎 翔平
はまざき しょうへい

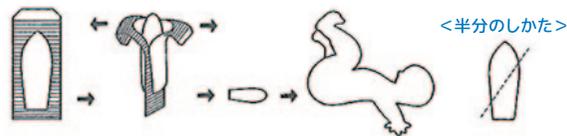
ジアゼパム坐薬(ダイアップ坐剤®)は、脳の神経細胞に働きかけて、けいれんを起こしにくくする作用があり、熱性けいれんを起こしやすい乳幼児に対しては、発熱時のけいれんの再発を予防する目的で使用されます。本剤は飲み薬と比べ吸収が早く速効性に優れています。熱性けいれんは、体温が急激に上昇する時に最も起こりやすいので、体温が37.5度を越えた場合には、できるだけ速やかに医師から指示があったジアゼパム坐薬の1回量を肛門内に挿入してください。5~10分ほどで、抗けいれん効果が現われ、約8時間持続します。もし挿入後も38度以上の発熱が続く場合には、挿入から8時間後にもう1度だけ挿入してください。通常、2回の投与で24時間効果が持続します。ただし、けいれんの再発の可能性があるなど医師から特別に指示があった場合のみ、2回目の坐薬を挿入してから16時間以上の間隔をあけて3回目を挿入してください。



坐薬を使用後30分間は肛門からお薬がもれていないことを確認してください。入れた直後に坐薬がお尻から飛び出して来た時には、出て来た坐薬を入れ直してください。もし、つまめないぐらいに柔らかくなっていけば、お薬の成分はかなり吸収されていますので、再度挿入する必要はありません。

また坐薬を半分にして使用する場合は清潔なカッターなどで包装された坐薬を斜めに切り、半分にします。肛門に挿入する際には、切った坐薬の上側を使い、とがった切り口の部分からの挿入は避けてください。残りは破棄するようにしてください。

幼児への坐薬の挿入の方法



図のようにして、おしりに深く入れてください。
入れた後はしばらく紙などでおさえておいてください。

| 体 重 | ダイアップ使用の目安 | | |
|------|------------|---------|----------|
| | ダイアップ 4 | ダイアップ 6 | ダイアップ 10 |
| 5kg | 0.5個 | 0.5個 | |
| 10kg | 1個 | 1個 | 0.5個 |
| 20kg | | | 1個 |

ジアゼパム坐薬を使用した場合、眠気やふらつき、活気の低下などの副作用が現れることがあります。これは薬を使用した後に一時的に起こる場合がほとんどで、特にご心配は要りません。しかし症状が強い場合や、長く続くような場合は医師にご相談ください。

次にジアゼパム坐薬と共に解熱用の坐薬(アセトアミノフェン坐剤など)が処方される場合があります。解熱剤自体は熱性けいれんを予防する効果は弱く、主に発熱による苦痛や不快感を軽減する目的で使用されます。この場合、各坐薬の使用するタイミングが重要です。この2種類の坐薬を同時に使用すると、ジアゼパム坐薬の吸収が悪くなり、効果を弱める可能性があります。両坐薬を使用する場合には、ジアゼパム坐薬を先に挿入し30分以上間隔をあけてから解熱用の坐薬を入れましょう。

なお、坐薬を使用した場合には、発熱の状況や坐薬の使用時間などをメモし、次の受診時に提出してください。坐薬が適切に使用されたかどうかを判断するための大切な情報になりますのでご協力ください。もし分からない事などございましたら医師又は薬剤師にご相談ください。

くす通信

第229号
2020年3月1日

国立病院機構熊本医療センター 発行

小児科より

熱性けいれん

薬剤師より

ジアゼパム坐薬(ダイアップ坐剤®)の 使い方と注意点



3月

「くす(樟)」の由来について

くす(樟)は常緑の広葉樹で、熊本城内に多く見られます。種々の精油成分を含み、良い香りがします。樟脳をはじめ色々な薬用成分が抽出されるなど有用な薬用樹でもあります。

また、くすし(薬師)とは、医師のことを指し、くすしぶみ(薬師書)は医術に関する書物のことを言います。

本誌はこの「くす」にあやかり、健康な生活を送るために情報を提供しております。お気軽にお読み下さい。

熱性けいれん

小児科医師

おかだ たくみ
岡田 拓巳

● 熱性けいれんとは

熱性けいれんは、主に生後6ヶ月～6歳未満の子どもが通常38度以上の急な発熱に伴って意識障害や痙攣を起こす病気です。発熱時に痙攣を起こす病気は、髄膜炎や脳炎、てんかんなど多岐にわたっており、そのような痙攣を起こす病気がなければ熱性けいれんが疑われます。

日本では5歳までの子どもの5%前後に見られ、欧米より頻度が高いといわれています。熱性けいれんは、30%が2回以上、6%が3回以上繰り返すといわれていますが、ほとんどは成長に伴い起こさなくなり、発達にも影響しない良性の病気です。

熱が上がる時に起きることが多く、痙攣の様子は突然手足を突っ張る強直性痙攣や、手足をガクガクさせる間代性痙攣、両方が見られる強直間代性痙攣などがあり、白目やチアノーゼ、嘔吐を伴ったり、脱力してぼんやりするだけの場合もあります。

● 痙攣時の対応について

痙攣が起きたときは、人を呼び、安全な場所へ運び、吐物が喉につまらないように横向きに寝かせてあげます。意識障害が続いていないか、目が合うか、話せるか、指示に従えるかを確認し、5分以上痙攣が続いたり、痙攣後反応が悪い場合はけいれん重積といって重症な

病気が隠れていることがあるため救急車を呼びましょう。多くの熱性けいれんは、単純型熱性けいれんといって、2,3分以内に自然に止まってしまう、その後は眠ったり大声で泣くことが多いので、それであれば落ち着いて病院を受診しましょう。



病院では『熱がいつからあって、どんな痙攣が、どれくらいの時間あったのか』聞かれることが多いため余裕があれば、痙攣について時間計測も兼ねて動画を撮るといいかもしれません。

● 注意すべき複雑型熱性けいれんとは

下記の3つのうち1つでも当てはまる場合は、複雑型熱性けいれんと診断します。複雑型熱性けいれんは、けいれんや熱の原因に重症なものが隠れている可能性があり入院も含め検査や治療を行っていくことになります。

- 左右差があったり、ぼんやりして眼球上転するなどの症状
- 15分以上続く発作
- 最初の発熱から通常は24時間以内に2回以上繰り返す発作



● 最後に

熱性けいれん、特に複雑型のものを繰り返しやすい子どもには、発熱時痙攣予防のための座薬を使うことがあります。しかし熱性けいれんのほとんどは自然に止まり、繰り返さないので、医師の指示に従い使用しましょう。

熱性けいれんについては『熱性けいれん診療ガイドライン2015』が詳しいので、興味がある方は参考にしてみてください。

小児科の紹介

当科では感染症など小児の一般的な疾患に加えて、アレルギー、免疫疾患の診療にも力を入れています。近年増加している食物アレルギーに対しては経口食物負荷試験を行って評価し、最低限の食物除去指導を行っています。難治性の小児喘息に対しては、生物学的製剤による治療も積極的に行っています。また、アレルギー診療の認定看護師がスキンケア、生活指導にあたっています。

免疫疾患では免疫不全症（感染症が反復・難治化）、周期性発熱、不明熱、膠原病などの診療を行っています。

小児の救急疾患（けいれん、急性熱性疾患、事故など）についても常時受け付けており、入院診療も行っております。



国立病院機構熊本医療センター

- 診察日 月曜日～金曜日
- 休診日 土・日曜日及び祝日
年末年始（12月29日～翌年1月3日）
- 診察日 月曜日～金曜日

〒860-0008 熊本市中央区二の丸1-5
TEL 096 (353) 6501 (代表)
FAX 096 (325) 2519
H P <https://kumamoto.hosp.go.jp/>

※ 形成外科の受付は、水曜日以外の13:30～16:30となります。

※ 一部の科では、午後に予約診療を行っていますが、新患、予約のない方の午後診療は行っておりません。急患はいつでも受診できます。